



Mountain.9

「北漢山（プカンサン）・ソウルの山」

韓国のソウル市街の北側に北漢山国立公園がある。公園は、二つの地域、北漢山とその北にある道峰山（ドボンサン）からなっている。北漢山（プカンサン）は、白雲台（ペグンデ、836m）、仁寿峰（インスボン、810m）、万景台（マンギョデ、799m）の三つの峰から成る花崗岩の山である。このため、三角山とも呼ばれる。北漢という名は、ソウルを流れる漢江の北側にあることからきている。下に全体図を示す。上の顔写真は白雲台頂上付近で。背後の岩山は仁寿峰。



北漢山国立公園全体図

この山域には、北漢山城という山城があった。公園内にある説明板によれば、この城は壬辰倭乱（文禄、慶長の役）と丙子故乱（清の侵略により起きた戦争）の経験に基づき、非常時に備え、漢陽（ソウル）の外部に城を築こうという議論の末、1711年（肅宗 37年）に造られたものだという。軍事指揮所である将台を3カ所に置き、城門6基、暗門6基、水門1基を設けた。また、僧軍を駐留させるために12の寺を設け、1712年（肅宗 38年）には行宮（臨時の王宮）と軍倉を建てた。近年崩壊していた大西門、大南門の修理、大城、大東門などの復元、城郭と女牆（じょしょう、小さい塀）などの修理、整備などが行われた。

北漢山国立公園に最初に行ったのは、1996年10月23日だった。ソウルで開かれたある国際会議のとき、午後3時くらいまで空いた時間があったので、教え子でソウルの大学の教員をしていた愈淳載君に、近くの山を案内してくれないかと頼んでいた。当日、愈君は、自分には行けなくなったので、と代わりに一緒に行ってくれる人を紹介してくれた。記録がなく名前がわからないが、大学教授と会社社長である。社長は運転手付きの車に乗っていて、会議の会場に迎えに来てくれ、大統領公邸の青瓦台の近くを通ってその北に

ある北漢山国立公園に連れて行ってってくれた。ルートはよくわからないが、西側から登って東側に下りた。下りたところには社長の車が待っていて、そのまま、昼の食事に連れて行ってってくれた。なんとも豪勢な山登りである。ただ3人の会話は、教授と私は英語、社長と私は日本語、教授と社長は韓国語で、三つの国の言語が飛び交う変わった会話の形になった。

山で撮った写真を載せておこう。石の山であることが分かる。このとき行ったコースでは、手すりや階段はあまりなかったようだ。今回白雲台に登った感じからは、1996年の山行では白雲台には登っていない。白雲台への登山道が整備されたのは、比較的最近のようなので、この時はまだ整備されていなかったのかもしれない。ちなみに、仁寿峰、万景台は、現在もエキスパート以外はたしか登山禁止である。大東門に行っているのので、北漢山国立公園の南側を歩いたということなのだろう。



社長（左）と教授（右）1996年



石の坂をロープで下りる



大東門で

2回目は、丁度 20 年後の 2016 年 9 月である。準教え子の東国（トングック）大学の Kang 教授が、私が 9 月に 80 歳を迎えるのを知って、お祝いをしたいから、ソウルに来ないかと招待してくれた。そこで妻の伸枝と一緒にいくことになった。現地でのお祝いの席上で、古くからの知り合いの Min 教授から、韓国では 80 歳は、日本と違って重要な年なんだと聞かされた。Kang にどこへ行きたいかと前もって聞かれて、「北漢山」と答えたら、同じ大学の Lee 教授に案内してもらおうという。本人はかなり太っている上に、前日ポーランドの国際会議から帰ったばかり。山には行かないのかと思っていたら、本人も行くという。これにはちょっと驚いた。

当日の 22 日は、10 時 40 分に二人で、ホテルのグランド・アンバサダー・ソウルに迎えに来てくれた。それから歩いて明洞付近の珍古介でブルコギの昼食。朝食後、近くからタクシーで、牛耳洞（ウイドン）を通り、道誼寺（トソンサ）の下にある登山口へ。



北漢山歩行ルート



道誼寺付近の登山口

この登山口には大きな売店もあり、Kang が水を買ってきて一本くれた。12 時 56 分出発。まずは左の写真のような門をくぐる。上には信号がついている。赤は天候が悪い時で登山は禁止。この日は黄色だった。ウィークデイだったが、登山客も多い。土日は混雑するようだ。はじめのうちは石畳風の道、まだ樹木が多い。

ところどころに案内板などがあるが、ほとんどがハングルで何が書いてあるのか、よくわからない。これが困るところだが、Lee が英語で説明してくれる。彼は米国で学位をとっただけあって英語がうまい。緑の木々の間を行くと、仁寿峰（インスボン）が見えてきた。次の写真のように、噴火の際にマグマの通り道にたまった溶岩が侵食に耐えて残ったという感じである。実際のでき方はどうだんたんだろう。韓国には現在活火山はないらしい。200mに及ぶ垂直に近い壁で、ロッククライミングの場所として人気があるという。仁寿峰待避所があった。警察官の派出所があり、この日は、ロッククライミングをしている人がいたのだろう。警察官が大型の双眼鏡で様子を見ていた。



仁寿峰 インスボン



双眼鏡で様子を見る警察官



白雲山荘前で一休み

仁寿峰は背中に子供をおぶっているように見えるので、Bu-a 山とも呼ばれると、英語の説明がある。Bu-a は韓国語を英語表記したもののだろうが、よくわからない。(その後、愈淳載君から来たメールには、Bu-a は Ppul から変化したもので、鉛筆のように尖った形状のことをいい、尖った山のこと、もう一つは負児岳 (子どもを背中に負んぶした形状) の韓国語の発音が BuA Aku だったことから、とあった。)

仁寿峰待避所から少し行くと、長い階段だ。これはひたすら登るだけ。面白くはないが、邪魔な物が多い急坂を登るよりは楽だ。一登りして白雲山荘についた、ここは仁寿峰登山の基地にもなるようで、宿泊もでき、ちょっとした食事もできるらしい。私たちはここには入らず外で休憩。左の写真。左から、Lee、Kang、私。

白雲山荘からは一歩きで、衛門に着いた。後で行く龍岩門のところにあった説明文を借用して書くと、衛門は暗門の一つだろう。暗門というのは、一般の城門とは異なり、隠れた場所にあるもので、戦時中には秘密通路として用いられた。アーチ形ではなく方形の門であること、上部に門構えがないことが特徴のようだ。次の衛門の写真を見ると、この特徴を持っている。ここが白雲台への登山口だ。もちろん、登らずに門をくぐってまっすぐ進むこともできる。案内役の Lee が登山口で言っていたのは、白雲台に登るかどうかは、衛門に着いたとき考えましょう、ということだった。衛門に着いたとき、Lee が伸枝に言った言葉は、You must climb だった。これまでの歩き方を見て登れると判断したのだろう。伸枝は登ることにしたが、Kang はここで待っているという。確かに疲れているのは見て取れる。なにせ重そうな体格だから無理もない。

下左の写真で、ストックで指しているのは、右の写真の白雲台頂上である。右の赤四角の拡大図を見ると、頂上には人がいる。これは肉眼でもよく見えた。しかし、はるか上である。Lee が、ここが登るかどうかの判断場所と言ったのも頷ける。



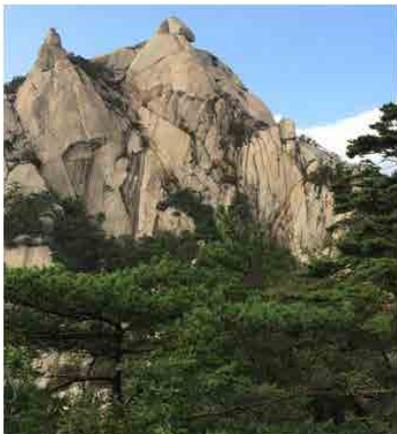
衛門



衛門から白雲台頂上を見る



さて、いよいよ白雲台への登りである。まずは、南側から撮った白雲台の写真を下左に示しておこう。衛門をくぐり、龍岩門へ向かう途中の道からの写真である。衛門は右端にあるので、この右の花崗岩の斜面を登るわけである。一般登山者はそれなりの設備がないと登れない。一つは、かなりの部分につくられている階段である。下中の写真。次は岩を掘って鉄の支柱を埋め込み、支柱の間に張ってあるロープである。このロープが尋常ではない。直径数 cm もあろうかと思われる太い鉄のロープである。さらに急なところにはロープに加えて、岩にステップが切ってある。下右の写真。



白雲台の南面



長い階段

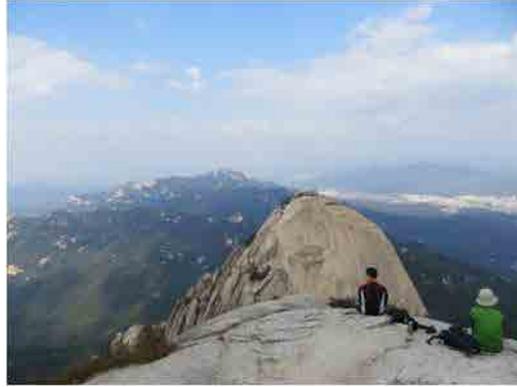


ロープとステップ

これらの仕掛けのおかげで、この難しい斜面も比較的楽に登れて、無事、韓国北部の最高峰、白雲台（ベグンデ、836m）の頂上に立つことができた。頂上には韓国の国旗がはためいていた。左写真。東の方角には、あの近づき難い仁寿峰が少し下に見え、その向こうにはソウルの市街が広がっていた。



白雲台頂上 Lee と



仁寿峰の頭部

頂上では Lee がロシア人に話しかけられて、いろいろ説明していた。英語が役立つ。ドイツ人など外国人も多い。急な滑りやすい岩の斜面は下りも要注意。下りの道からの正面は三山の一つ、万景台（マンギョデ）だ。そちらの方角を眺めて驚いた。登山禁止と聞いていた頂上付近になんと、数人の人がいるのだ。多分許可をもらって登っているのだろう。たいしたものだ。左下の写真。中の写真は伸枝がロープの場所を下りにいるところ。右の写真は、衛門に下りたのち、万景台西側にある西に進む道。階段が見える。Lee のお気に入りの風景だ。



万景台 登山者が見える



白雲台からの下り



万景台西斜面 階段の登山道

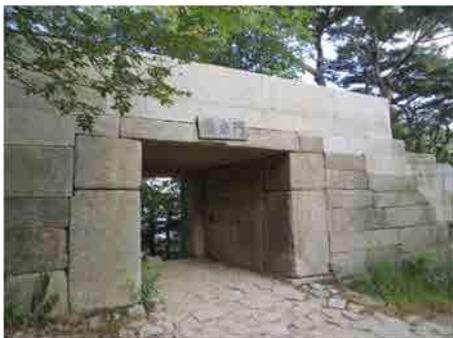
衛門に戻ると、Kang は上着を着こみ、待ちくたびれた顔をしていた。ちょっと頂上に長居しすぎたかな。衛門をくぐって龍岩門への道を歩いた。右上の写真の階段に登らなければならない。やれやれ。

龍岩門に近くなってきたころ、一匹の小動物が道の横に姿を現した。近づいても割に平気な顔をして果実を食べている。リスのように見えるが、特別な名前があるのかな。知っている人がいたら教えてほしいものだ。



果実を食べるリス？

龍岩門には、4時25分頃着いた。珍しく日本語の説明文がある。一部は前に紹介したが、ここの分は、龍岩門は北漢山城大東門の北にある暗門で、山城が築城された1711年に建てられた。龍岩門上部の女塙(じょしょう、小さい塙)は崩落していたが、1996年に復元されたという。確かに門の上は新しくなっていて、復元された感じはある。女塙という言葉は難しい。説明文はもっと一般的な言葉を使ったらどうだろうか。



龍岩門



龍岩門に続く女塙(小さい塙)

龍岩門から道説寺(トソンサ)までは歩きやすい山道。Leeはマイペースでどンドン歩く。2番目の私は後から来る伸枝とKangの中間で様子を見ながら歩く。5時少し過ぎに道説寺に着いた。想定以上に時間がかかったということだろう。

このお寺はどういうお寺だろう、とネットで調べると、韓国で最強パワーのお寺という記事が出ていた。一番運気の強いお寺という。しまった、もう少しまじめに拝んでおけばよかった。人出も多く、建物も立派。入口の門の上には、三角山道説寺とあった。



道説寺(トソンサ)



道説寺(トソンサ)山門

北漢山国立公園には、たしかにお寺が多い。前の説明には、北漢山城を守るため、僧軍を駐留させるために12の寺を設け、…とあったが、このお寺もその一つなのだろうか。

道説寺のバス停にはバスを待っている人が大勢いた。Leeはうまく客を降ろしたタクシーをつかまえ、比較的早くホテルに帰ることができた。それでもコリアハウス(もとは韓国政府の迎賓館)の予約時間には到底間に合わず、スケジュールに入っていた伝統芸能は見損なった。

しかし、80歳のお祝いの会はコリアハウスでしっかり開かれ、Min、Kang、Lee、Chung、それに案内役のLeeが出席してくれた。日本語を話す給仕の女性の説明を聞きながら宮廷料理を食べ、金の鍵をプレゼントされ、バースデイケーキのロウソクを吹き消し、満足の会だった。

帰ってから、Kangに礼状を書いたら、返事がきた。それには、研究の話は何もなく、今度韓国に来たときは、一緒にソウル大学の後ろにあるGwanaksan Mountainに登りましょう、と書いてあった。もしも彼が体を鍛えて先生に負けないように登ろう、と考えているなら、82歳、いや85歳になっても行かなきゃならんな、とつぶやいていたら、そばにいた伸枝が、「それって師弟愛? それとも単なる山好き?」と聞いてきた。「いやー。……」

最後の師弟愛は創作です。失礼しました。